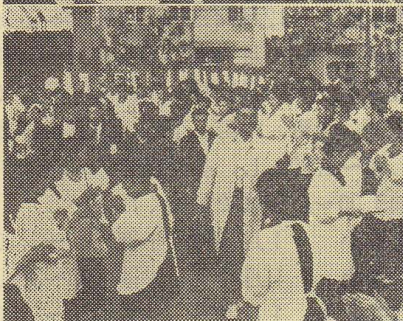




10月11日、天皇、皇后両陛下がお揃いでお成り、鳳鳴会場をご覧になりました。天皇陛下が大館にお立寄りになったのは、昭和22年以来14年ぶり。皇后陛下は始めてのお出です。



国体旗は、前回の開催地熊本から2000キロ、延20,000人の若人によってリレーされて、由利郡小砂川の県境で引き継がれた。これより県内を巡回、10月1日に大館入り、翌2日、田代町～鷹巣方面へリレーされた。



10月8日の開会式を前に、4日頃から選手たちは、ぞくぞくと大館入りホームや駅頭には婦人会の方たちが繰出、さかんな拍手でお迎えました。(上、プラカードを手に列車の

国体の力をみ

成功は市民

80年に一度といわれました。第16回国体も、極めて好評のうちにその幕をとおすることができました。これは一重に市民のみなさんのご協力の賜でございまして、心から厚くお礼申しあげます。

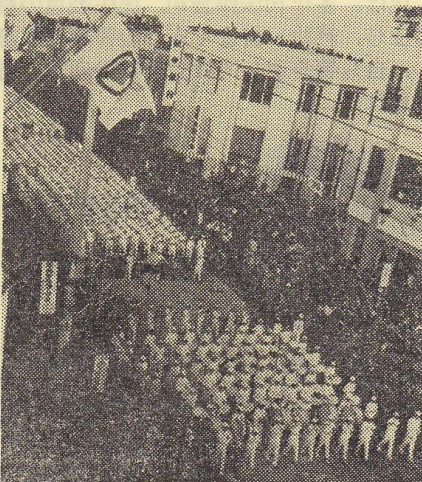
遠く沖縄をはじめ、全国の各地から初めて、わが大館を訪れた1500名余の選手役員の人たちも、6万市民のまごころの歓迎と、心づくしに接し、さぞ深い好印象を土産に、おもち帰りいただいたと信じます。

そしてこの好印象が今後永く大館市の土地や、市民性を評価する尺度ともなることでしょう。今後大いに発展しようとする、わが大館にとって、これはまた大きなプラスです。

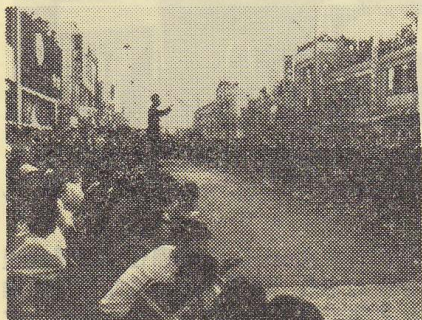
私には、この国体が、大館市にまた一つ大きな意義をもたらしてくれたと思います。と申しますのは、ふりかえつて、この第16回国体が、貧乏県、後進県といわれた秋田県で、開催するというだけでも、果してやれるであろうかと心配をうけたものであります。まして、その県の中でも、わが大館は相次いだ大火によつて、財政的にもゆとりがなく、しかも復興の最中にあつたのですから、心配されるのも無理のない話であります。

しかし、大館人はそんなに気の弱い市民性をもっているのでしょうか、決してそうではないのだ。連続の大火にもめげず、こんなに立派に街をつくりかえる力さえもっているではないか、私の心の奥底には、その気力、その意気地をもつ6万市民がついているのだ、という強い支えがありました。やれずにいられるものか、そうは思いながらも、何分にも期日に余裕がない。国体はすぐ目の前にせまつていることを考えると、気のあせるのも無理ありませ

到着を待つ婦人会員、下、選手のみなさんごくろうさまでした、さかんな拍手で迎える大館駅頭)



選手歓迎の集い。8月炎天下うだるような暑さの中で合同演習をつづけてこの日を待った市内4小学校児童800人による鼓笛隊の進行。だれがこの出来ばえを期待できたろう。遂にきた国体のもりあがり、そして興奮を、じかにブツケられたような鼓笛の響きが未だに耳をはなれない。



選手歓迎の集い。

桂高校生徒 600人による合唱。屋外ステージならぬ街路ステージ?、大町通りいっぱいにはひろがる大合唱団の隊列である。

県民の歌、若い力、鳳鷹高校、一中、二中、三中の合同ブラスバンドにあわせての大合唱は四周を押し、観衆を魅了した。



選手歓迎の集い。

市内松木、谷地町、大下町の有志による獅子舞。奴子、棒使い、獅子舞と郷土芸能の粋をあますところなく披露した。農繁期の最中、この日のために春以来寸暇も練習に励んだのだ。奴子を舞うこの子たちも。(写真上、獅子舞、下、奴子踊)